
出口のない森

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出口のない森

【Nコード】

N2764P

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

香織は、愛犬を連れて初めて行く公園で、二匹を連れて男の人と知り合いになった。

その男の名前は石島和明と言い、独身で小さな居酒屋を一人でやっている。

素朴な印象を持った香織は何の抵抗もなく、自分のアドレスを教えた。

ところが、アドレスを教えた他の女性は石島に付きまとわれ……。

出口のない森

滝 龍太郎

1

「こんにちは」

愛犬のメリーを連れて、公園ですれ違った人に挨拶した。
その男の人は二匹の柴犬を連れている。

メリーは柴犬に近づかず、飼い主の後ろに隠れている。

一歳になったばかりのメリーは甘えん坊のマルチーズである。

「いくつですか？」

犬好きの加谷野香織は、寝そべっている柴犬の頭を撫でた。

「こつちがオスで四歳。こつちはメスで三歳」

「夫婦なんですか？」

「兄妹みたいな感じですね」

もの腰柔らかな言い方である。

「そうですね。ウチのはまだ一歳でして、他の犬に慣れなくて・・・

」

メリーは香織の後ろでワサワサしている。

「直に慣れますよ。このジョンとさくらだって最初はなかなか慣れなくて、こうやって散歩をして慣らして行っただけですよ」

「ジョンとさくらと言っただけですか？ 良い名前ですね」

語呂が良いので香織がクスツと笑った。

「ええ。さくらと一郎も考えたんですが、それでは歌手になってしまうのでジョンにしたんです」

「淒く語呂がいいですね。この子はメリーです」

香織がメリーに指を差した。

「メリーちゃんね」

会話が弾んでいる間も、メリーは香織の後ろでワサワサしている。ジョンとさくらは太りぎみのせい、二匹共寝そべったままである。

「疲れちゃったのかしら」

香織がジョンとさくらを見て言った。

「まだ一周なのに。ほれ！ 行くよ」

男はジョンとさくらのリードを引っ張り、二匹を立たせた。

「いつもここで散歩してるんですか？」

香織が聞いた。

香織はこの公園が初めてなのである。

いつもは家からすぐの公園へ行ってるのだが、そこは広い芝生があるだけで全体的には狭く、動きたがりやのメリーにはいささか不満なのである。

そこで、車で四、五分の、まあ近い所にあるこの公園にやって来たのである。

大きな沼があって、その周囲に木立があり、それを縫って歩道が付いている。

木立のお陰で陽を遮ってくれるので楽である。

「ええ、ここで毎日です」

当たり障りのない話をしながら一緒に木立を縫って歩いていると、同じように犬を連れた人とかなりすれ違うのである。

その男の人は、その都度立ち止まって世間話を始めてしまう。

香織も相手の犬をあやしたりして話の輪に入っている。

しかし、メリーは止まっているのが嫌なのかワサワサしている。

「メリー、お友達よ」

香織がメリーを急ぎ立てるが、メリーは香織の後ろに逃げてしまふ。

「この子はまだ赤ちゃんなんで駄目なんです」

その都度、香織は同じ言葉を言った。

大きな公園には様々な人たちがやって来る。

当然、様々な犬もいる。

メリーのお尻を嗅いだり、メリーに吠えたり、活発だが甘えん坊のメリーは香織の後ろだけに滞まらず、抱っこを強要するのである。「赤ちゃんでどうしようもないんです」

香織はそう言うが、香織自身も止まって話しているより歩いているのである。

元来が犬の散歩に来ているわけで、世間話をしに来ているのと違うのである。

しかし、勝手に一人で行くわけにはいかず、話の輪に入って世間話を聞かなければならないのである。

中には犬の話題になつて興味のある話になる時もあるが、香織はあまりお喋りをしていたいとは思っていない。

そして午後四時過ぎ、公園を一周したのだが、殆どは立ち話をしている時間が多かったのである。

香織は満足がいかず、

「もう一周して来ます」

と言つてジョンとさくらと別れ、メリーの引っ張る力に任せて香織は木立の中に入つて行つた。

三十分後、香織とメリーが駐車場に戻つて来た。

駐車場から公園への入口にいくつかのベンチが置いてある。

そのベンチに先ほどの男の人が座り、下にジョンとさくらが寝そべっている。

「あら、まだいたのですか？」

時計を見ると五時十分前である。

その男の人は一人で小さな居酒屋をやっていると聞き、五時まで到店に入らなければと言つていたのである。

その居酒屋へはここから車で二十分と聞いている。

しかも店に行く前にジョンとさくらを家に置いて行かなければならないのである。

立ち話の中で、香織は色んな事を聞かされていた。

「ええ、ちよつと疲れてしまったので休んでいたんです」

二匹の犬に限らず、その男の人も小太りで体力がなさそうな感じである。

「時間、大丈夫なんですか？」

「ええ、開店は六時なんで、仕込みはチヨチヨツとやっちゃいますよ」

照れくさそうな笑いを浮かべて、よっこいしょつと言つて腰を上げた。

「それでは……」

香織はその人と離れ、駐車場の中へ足を進めた。

その人は香織の後ろ姿を見つめつつ、ゆっくりと自分の車へ歩いている。

香織は白のワンボックス。

「さあ、乗って」

後ろのドアを開けてメリーを乗せ、香織がチラツと振り向くと先ほどの人が車に乗るところであつた。

黄色のワンボックスで、ジョンとさくらを後ろの席に乗せようとしていた。

（派手な車に乗ってるわ）

歳といつても年齢は聞いていないが四十半ばくらいに見える。その歳の人が、黄色の車に乗っているのが意外であつた。

2

その男の名前は石島和明と言い、四十八歳の独身である。

小さな居酒屋を一人でやっており、気ままな生活を送っている。

親と同居しているため、ジョンとさくらは散歩が終わると親に預

け、自分は店に出掛けるのである。

午後六時から午前〇時まで働き、家に着くのが夜中の一時過ぎで、帰るとジョンとさくらが尻尾を振って来るので寝るのはいつも三時過ぎになってしまう。

店は私鉄の駅前にあり、勤め帰りの人が主に利用し、六時からの六時間で十分にやっていけるのである。

カウンターだけの十人が座ればいっぱい小さな店だけに、常連が多くサラリーマンの憩いの場になっている。

一人で出来る限界の店なのであろう。忙しい時などは人手がほしい時もあるが、雇って気を遣うのなら自分一人でやっていた方がいいのである。

人付き合いが下手で、サラリーマンに向かないことを知っていて、若い時から食べ物商売の仕事に着いて手に職を付けて来たのである。口べたで人見知りするせいか彼女と呼べるほどのものは今までになく、既に結婚は諦めてしまっている。

ただ、こんな商売をしているのでお客に対しては人見知りせず、そつなくこなしてはいるが口べたの方は相変わらずである。

注文を受け、もくもくと調理をし、食べてもらう。

決してお世辞など言わないが味が良いせいか店は繁盛しているのである。

「マスター、一杯どう」

常連客にビールを御馳走させられる事がよくある。

「ええ」

とだけ言ってコップを出し、軽く口を付ける程度なのである。

好んで酒を飲む方ではなく、しかたがないといった感じである。

「明後日の日曜日、川でバーベキューをやるんだがマスターもどう？」

「こういう誘いはわりかしあるのだが、いつも断っている。

「いや、いいよ。休みの日は寝てた方がいい」

そう言って目を背け、黙々と包丁を動かすのである。

客の方もそう言われてはそれ以上は言えず、黙ってビールを飲むしかないのである。

こんな案配だから彼女どこるか友達も出来ないのである。
休みの日といわず、日々犬と戯れているだけなのである。

午前零時。

「そろそろ閉めますので・・・」

何人かいる客に、看板だと告げる。

客がいようがいまいが時間が来ればさっさと閉めようとする。

早く家に帰って犬と戯れたいのである。

そして昼過ぎに起き、遅い昼食を済まして、二時頃に二匹の犬を連れて散歩に出るのである。

家からは五分ほどでいつもの公園に着く。

そして四時過ぎまで公園で過ごし、五時に店に入るのが日課になっている。

「こんにちは」

口べたな石島は、犬の話になると饒舌になっていた。

しかも相手が美人の人妻となれば尚更である。

香織は四〇歳。結婚しているとは一度も話してはいないが、年相応の落ち着きは人妻と判断出来るのは当然の事であろう。

散歩の仲間は、他にロンドンという名のミニチュアダックスを連れた村井さんという香織と同じくらいの女性がいる。

香織が来る前は石島と良く連れ添っていたのだが、最近は少しずつ距離を置いて来ていた。

それは、ジョンとさくらの散歩に由来しているようである。

ロンドンもメリー同様止まっているのは好きでなく、早く先へと行きたがるので村井静香は別行動をとる事が多くなっていた。

「ウチのメリーもそうなのよ。じっとしているのが嫌いで、どんどん先へと行きたがるの」

静香と二人きりの時、香織がそんな話をした。

石島はすぐに立ち止まり、相手の女性とお喋りに講じるのである。

犬の散歩というより、自分のお喋り相手のために来ているのではないかと、香織はそう錯覚する事が最近では多くなっていた。

ただ、石島と話していて嫌な気分になる事はなく、専ら犬の話題が多いので歩きながらのお喋りなら別に嫌う必要はないのである。

「メール交換しませんか？」

ある時、香織の携帯電話に友人からメールが来たのを見て、石島がさりげなく言ってきた。

「いいわよ」

悪気のない、不器用な男という印象しか持っていないので、香織は軽い気持ちでアドレスを教える事に抵抗はなかった。

3

『今日は何時ごろ来ますか？』

石島からメールが来た。

『四時ごろになると思います』

五月も半ばを過ぎると、二時、三時は陽差しが強いので少し遅くと香織は考えている。

出来れば五時過ぎがいいのだろうが、それでは石島は帰ってしまうだろうから四時ごろとメールを返した。

『楽しみに待っております』

別に楽しみも何もないだろうにと、香織はこれといった感情は持たなかった。

そして四時少し前、香織の車が公園の駐車場に入ってきた。

駐車場の目立つ所に、黄色の車がすぐ目に入った。

香織は、黄色の車の何台か手前に白のワンボックスを止めた。

それを待っていたかのように、石島が二匹の犬を連れて白のワンボックスに近づいて来た。

手にビニール袋を下げている。

「店で使っているキュウリです。美味しいので食べて下さい」

香織が車から降りると、すぐにビニール袋を差し出して石島がニコリとした。

「えっ！ いいんですか？」

商売に使っている物を貰い、香織は恐縮して頭を下げた。

「ロンドンちゃんは来てないのですか？」

香織が辺りをキョロキョロして石島に聞いた。

「来てないですね」

「どうしたのかしら」

最近、村井さんとは顔を合わせていない。

時間がズレているのか、他の公園へ行ってるのだろうと香織は考えていた。

香織への応えはなく、石島は二匹の犬を連れて公園の方へ向かっている。

その後へ、メリーを連れて香織も着いて行く。

香織は何げなく振り返って見ると、パピヨンを連れて石川さんが歩いて来るのが見えた。

香織は軽く会釈をして顔を戻すと、石島は既に公園の中に入って先を歩いている。

（変ね）

スタスタと歩いている石島を見て香織は首を捻った。

いつもは自分の方からは歩かないのに今日は先に立って歩いている。

しかも香織がいるのに一人でスタスタ歩くのは珍しい事である。

そんな事を考えてゆっくり歩いていると、石川さんがパピヨンを連れて香織の側に来た。

「あの人変なのよ」

香織の顔を見ると同時に、石川が石島の方を見て言った。

「変？」

香織が聞き返すと、

「ええ。私の顔を見るとそそくさと行ってしまうのよ」

丸い顔の石川が、目を三角にして不機嫌そうに言った。
体型も顔に似て太っている。いかにも年増のおばさんという格好である。

おそらく五十歳は過ぎているだろう。香織はそう感じている。

「何なんでしょうね。話が好きなのに」

石川の話し好きは良く知っている。石島と同じように立ち止まっては良く喋っているのを見ているからである。

話の好き者同士、合うのではないかと思うのだが。

「こんなおばさんだし、ズバズバ言うから嫌なんでしょう？」

「そんな・・・」

香織には良くわからない。

話し好きの人は話し好きの人が嫌いなのかも知れない。それは話し上手であって聞き上手ではないのである。

公園に入ると先の方で石島が犬を連れた人と喋っていて、二匹の犬は地べたにはいつくばっているのが見えた。

その方向へ、香織と石川が近づいて行く。

石島は後ろを向いているので二人が近づいているのがわからない。
い。

ふと、石島と話している相手の人が石島から目を逸らした。

と同時に、石島が二人の方に振り向いた。

その先には香織と石川が近づいていた。

それを見た石島はすぐに体の向きを変えてしまった。

いつもならすぐに香織の方に来るのだが、石島の意外な面を見て

香織は首を捻った。

「こんにちは」

石島と話をしている相手の女性とは面識があつたので、香織が挨拶した。

石川は香織のすぐ隣にいる。

石川もその女性に挨拶し、その女性も香織と石川に挨拶するのだが、石島は背を向けたまま振り向こうともせず執拗にその人に話か

けている。

動物病院がどのと言っている。

「ええ、あその動物病院はいいですね」

相槌を打ちながら、その女性が香織と石川に気を遣っている。

なんせ石島は背を向けたままなのである。

香織とは先ほど挨拶をしているからいいようなものだが、石川とは今日初めてなので挨拶ぐらいはするのが当たり前である。

それもしないで背中を向けたままでは、話している相手が気を遣うという気持ちかわからないのであろうか。

「行きましょう」

石川は気分を悪くしたのだろう、香織の顔を見て石島の背中にぶつきら棒な言い方をした。

相手の女性はわかっているのである。香織たちに軽く会釈をした。

「あの人がいると気分が悪くて・・・」

石川が誰に言うともなく一人でブツブツと言っている。

「おかしな人ですね」

香織はあまりにも幼稚な石島の態度に呆れ返っていた。

「あんな明らかな態度を取られたら誰だって気分を悪くするわ」
香織も気分が悪くなっている。

「でしょう？ 回りの人たちだって嫌になると思うわ」

「いつ頃からなんですか？」

「半月ほど前よ。ミニチュアダックスのロンドンちゃんいるでしょう？」

石川が歩幅を心持ち広くし、話し出した。

「最近ロンドンちゃん来ないでしょう？ その理由はあの石島さんなのよ」

「何かあったのですか？」

変な事をする人とは思えないので香織が興味ある顔で聞いた。

「メールを交換したら、今日は何時ごろ来るのかとか何時に公園に行ってるから来ないかとか。そんなメールがしょっちゅうだったら

しいわ。村井さんておとなしそうで純粹って感じでしょ。その都度メールを返していたって言ってたわ。ところがある時、約束した時間に行けなかった事があって、石島さんから恋人のようなメールが来たんですって。それで不安になって私に相談に来た事があったのよ」

石川さんの話を聞き、自分にも同じようなメールが来ているので香織は嫌な予感がした。

「それで次の日に言ってやったのよ。村井さんの名前は当然言わなかったけど、しつこいメールは嫌われるわよって。それ以来よ。私を避けるのは」

「そんな事があったのですか」

「そうよ。今度は加谷野さんじゃないの？」

「そんな事はないですけど・・・」

石川にそう言われたので香織は否定したのだが、実際のところそれに近くなっている。

「気を付けた方がいいわ。毒にも薬にもならない顔をしているけど、内心じゃ凄いのかも知れないわ。あの歳で独身だしね」

「村井さんが来ないわけはそれだったのね」

「そうよ。それだけじゃなくまだあるのよ」

「まだ他に？」

自分の身にも迫る危険があるので、香織はふと足を止めて石川の顔を凝視した。

「村井さんは石島さんと遭うのが嫌で時間をずらしたのよ。十二時とか一時とかに。それなのに、あの黄色い車がずらした時間に駐車場にあるんですって。石島さんもそう考えて先回りしているのよ」

「嫌だわ」

香織はゾツとした。

「それから」

「えっ！ まだあるんですか？」

「村井さんはこの公園が気に入ってたんですけど、もう嫌だと言っ

て違う公園へ行き出したのよ。ところが、村井さんの車をその公園で見たと言ったメールが来たらしくて、村井さんノイローゼになっていたわ」

「ええーっ！」

まるでストーカーみたいな事をしているので、香織は益々気味悪くなってきた。

「今度は加谷野さんに同じ事をするんじゃないかしら」

石川さんの話は衝撃的であった。

人が良く、ぶきつちよで決して他人に危害を加えない人と思っていたのだが、意外な事を聞いて香織は戸惑ってしまった。というよりがっかりしてしまったのである。

犬友達としてうまくやって行けると思っていたのだが、こんな話を聞いてしまつてはそれも難しいだろう。

4

香織の行動範囲は少し広がって、車で十五分ほど離れた所にある公営の大きな公園に行ってみた。

メリーを、たまには違う所へ連れてってやりたいと考え、その公園を思いついたのである。

木立が多く、日中でも陽差しを遮ってくれるので苦にならない。

その木立を歩いていると石島からメールが来た。

『今日は来ないのですか？ ジョンとさくらが淋しがっています』

香織は何の気になしに今いる公園を教えると、

『今からそっちに行きます。待っていて下さい』

とメールが来たので、

『もう帰るところです』

香織は慌てて返事を送った。

別に変な事を言ったりしたりはしないのだが、お喋りが多く、散歩ではなくてしまつのであまり歓迎はしたくないのである。

それに石川さんから変な事を聞いてしまったので、出来れば遭いたくはないのである。

『それは残念！』

そんなメールが返って来た。

（何それ）

付き合っているわけではないのに、あまりにも馴れ馴れしい言い方に香織は自然と腹が立ってきた。

（四十八の男が言う言葉かしら）

石島は、四十八歳の独身で付き合っている人がいないと、自分から皆の前で言っていたのを聞いている。

（そんな事、皆の前で言うもんじゃないわ）

腹立つ気持ちを引きずり、時計を見ると四時を指していた。

（まだ時間があるわ）

石川さんの話を聞かなければどうという事はないのだが、あんな事を聞いてしまった以上は何となく不安になってしまった。

（帰ろう）

まだ三十分くらいしか経ってないのだが、石島がこの公園に来そうなのがしたので香織は帰る事にした。

駐車場に戻り、黄色い車がないか辺りをキョロキョロしてみたが黄色い車は見当たらなかった。

しかし、いつ入口から入って来るかわからない不安があり、香織は変な苛立ちを覚えた。

何も悪い事をしていないわけではないのに、なぜ肩身の狭い思いをしなければいけないのか。なぜ気にしなければいけないのか。

考えれば考えるほど、苛立ちが強くなって来る。

そんな苛ついたまま、香織は駐車場を出た。

ふと、入口の方に目を遣ると黄色い車のお尻が見えた。

この公園は入口と出口が別々になっているので鉢合わせをする事はないのだが、駐車場はそんなに広くなく、もう少しまごついていれば遭ってしまったところである。

その黄色い車が石島であればの事であるが。

しかし、黄色い車というのは意外と少なく、しかも同じ車種であれば石島の可能性が高いのである。

香織は急いで家に帰り、今日の出来事をメールで村井さんに送ってみた。

「その車、石島さんに違いないわ。実は、私もそんな経験があるんです」

村井さんが香織に同情したのか、自分の経験談をメールではなく、直接香織の携帯電話に掛けて来た。

その内容は石川さんから聞いた話と寸分変わらず、香織は呆れ果ててしまった。

「私の家も知ってるのよ」

「えーっ！ どうして？」

香織も家を知られている。

最初の頃、家の場所を聞かれていたので何の気なしに町名を言ったら、何日か後に車が止まっていましたねとメールが来た事があった。

その時はたまたま通りかかって車を見たのだと思っていたのだが、今考えてみると探し回ったとしか考えられないのである。

「家はどっちの方と聞かれたので、あっちの方よと指を差した事があったの。その後、指を差した方に行って私の家を探したみたいよ」

「ナンバーを知ってるの？」

「おそらく、ナンバーを控えたのだと思うわ。そうじゃなければ探すわけがないもの」

村井さんの乗っている車は一般的な車で、色も一般的なものである。

それをあっちの方とだけ言っただけで探し出すには、当然ナンバーを知っていないと出来ない事である。

「それでわかったわ。私の車もすぐに見つけたのにはナンバーを控えていたのね」

香織は考えると腹が立って来た。

何の関係もない人に自分のナンバーを控えられ、それを探し回るとは。

「呆れた人ね」

「そういう人なのよ。話している時は丸つきりそんな人と感じさせないけど、離れていると執拗に追って来るわ」

「嫌な人。ギャフンと言わせてやりたいわ」

「ええ……。でも、ああいう人は何をするかわからないので怖いわ。家も知られているし、そつとして置くしかないわ……。」
村井さんは心配している。

一見優しそうだが、何かのキツカケで突然牙を剥き出すかも知れない。

しかし、そういう姑息な事をする人にそんな大胆な事は出来ないだろうし、石島がそんな人には見えないのである。

香織の独りよがりかも知れないが、石島の人物評価は当たっていると思っっている。

「そうよね……。」

香織はそう言ったが、事が起これば容赦はしないつもりでいる。おとなしそうに見えても、気性の荒いというより強い女なのである。

翌日、香織はいつもの公園へいつもの時間に行ってみた。当然、駐車場の中央付近に例の黄色い車が止まっていた。

時計を見ると三時少し前である。

香織は、黄色い車からわざと離れた所に車を止めた。

そして、メリーを降ろして歩き始めると、いつの間にかジョンとさくらを連れて石島が近くに来ていた。

「やあ」

「あつ、こんにちは」

咄嗟の事で香織はびっくりした。

まるで香織が来るのを待っていたかのようにである。

「昨日、あの公園へ行っただですよ。加谷野さんが帰った後みたいでしたが……」

やはり、あの黄色い車は石島の車に違いなかったのである。

「そうですか……」

香織は反発するような言い方をし、石島に目を合わせずジョンとさくらの方を見ている。

「残念でしたよ。でもいいや、今日は一緒に散歩出来るから」

「あら、石島さん。今日は約束があつて石川さんと一緒なんです。それでも良かったら一緒にどうぞ」

石島の嫌いな石川である。

「えっ！ あつ、あ……」

石島は声にならない言葉を吐き、辺りをキョロキョロしている。「もう来ると思うわ」

昨日の出来事を村井さんに話し、その後で石川さんに連絡したのである。

そこで二人で話し合つて今日の出来事になったのである。

そうとは知らず、いつもの調子で石島は香織に近づいて来たのである。

そこへ見慣れた車が駐車場に入つて来て、パピヨンのジェニーと一緒に太った石川が車から降りて来た。

石島は苦い顔をし、二匹の犬を連れて香織の側から離れて行った。その後ろ姿は、しょぼくれた親父そのものである。

「石島さんどうだった？」

石川が香織の側に来るとすかさず聞いてきた。

「凄くがっかりしてたわ。一緒にどうぞって言ったのに、苦虫を潰したような顔をして行ってしまったわ」

「そう、見たかったわ、その顔……」

石川はそう言うと、ワハハと大きな声で笑い出した。

「よっぽど石川さんが嫌いなね」

「私も大嫌い。だから嫌われてもらつて大助かりよ」

ワハハと、石川がまた笑った。

「加谷野さんは知らないと思うけど、村井さんの他にも同じ事をされた人を何人か知ってるわ。一見、毒にも薬にもならない感じでしよう。そこが曲者なのよ。犬を隠れみのにして接近し、メールを交換するのがあの人の常套手段なのよ」

石川の言葉を、香織はふんふんと聞いている。

「そして後を尾けるかどうかは知らないけど、住んでいる所を嗅ぎ付けてどうのこうのとメールをするのね」

香織がそうなんだろうと言わんばかりに言った。

「そうね。犬との会話の中で住んでいるのはどっちの方？ とか簡単に聞けるものね」

まさにそうである。そのための犬なのである。

犬の散歩と称し、実際は女目当てなのである。

その証拠に散歩とは名目だけで、殆どが立ち止まって喋ってばかりなのである。

だから、ジョンとさくらも石島同様太ってしまうのだろう。

「友達いないのかしら？」

「いるわけないわ。あんなウジウジした性格、相手が男だったら殴られてるかも知れないわ」

的を得た石川の言葉に、香織はその通りだと思った。

「だから女の友達がほしいのよ。恋人など到底望めないでしょうから、ただの友達でもいいのよ。その道具が犬なのよ」

「可哀想な人ね」

話ながら、公園の中ほどまで歩いて来た。

途中、何人かの犬を連れた人とすれ違っている。

女性一人もいれば、男性一人の人もいる。

男女一緒の人もいるが、女性一人というのが多く見られる。

「他の人たちはどうしているんですか？」

女性一人の人を見て、香織が疑問に感じていた事を聞いた。
「時間をずらしたり、他の公園へ行ってるみたいよ」

「そうなってしまうのね」

何の関係もないのに、堂々と公園に行く事が出来ない不条理に、香織は石島に対して嫌悪感を増していた。

5

村井さんから香織にメールが来た。

あの公園へ行ってしまったい、石島と散歩をしたと書かれていた。仕事をしている関係上、時間的にあの公園が適していると綴られていた。

村井さんは仕事を持っているので時間の制約がある。

三時に仕事が終わわり、その足で買物をすませ、すぐに公園に来て四時半ごろまでが犬の散歩の時間なのである。

そして家に帰って夕飯の支度をするわけで、時間的にあの公園が丁度良い場所なのである。

それに、この時間帯は陽差しが厳しく、木立の多いあの公園は散歩しやすいのである。

『嫌だったでしょう』

『ええ。でも仕方がないわ』

メールの言葉の中に、落胆した村井さんの顔が浮かんで見えるようである。

そして先日話になった。

香織はメールから電話に切り替え、その時の様子を聞いた。

「石川って呼び捨てにしてたわ。なんで石川なんかとって言う言い方よ」

「石川さんが聞いたら怒るわ」

「当然よ。聞いているのがすごく嫌だった」

「わかるわ」

いない人の悪口など聞きたくないものである。しかもいい歳の男が女の悪口をである。

それを他の女に言うなんて最低である。

「加谷野さんの事を随分気にしてたわ」

「どんなふうによ？」

自分のいない時、自分に対してどんな事を言ってるのか香織はぜひ聞きたかった。

「何となく避けられているような気がするって言ってたわ」

「わかってるじゃない」

「いや、わかってないわ。心当たりは何もないって言ってたもの」

「えーっ！ そう言ったの。何もわかってないんだわ」

香織は呆れてしまった。

自分が避けられている理由に心当たりがないと言う。

では何なのか、考えた事があるのだろうか。

（いや、ないんだわ）

自分勝手の解釈で他人がどう思うと関係ないのだろう。

常識を逸しているのかも知れない。

そうであれば常識的な事は何も通じないであろう。

そう考えると、石島に対してあれやこれやと気にしている自体が馬鹿らしくなってくる。

「村井さんはあの公園へ行くようなのね」

「しかたがないわ。気にするのよそうと思ってるの。煩わしいけどね……」

村井さんの最後の言葉がその通りなのである。

単なる犬の散歩なのに、石島の存在だけで煩わしくなるのである。その煩わしさを避けるために時間をずらしたり、他の公園へ行くようになったわけである。

しかし、本来の目的を考えると、何も気にしなければただの散歩で終わる事が出来るのである。

近づいて来れば大人として無視は出来ないが、単なる挨拶程度で終わりにすればいいし、石島が立ち止まっても自分のペースで進み、着いて来るなら着いて来たでいいのである。

相手を気にするから相手のペースで散歩をするようになってしま
う。

だから気にせず自分のペースを貫こうと、香織は気持ちを切り替
える事にした。

翌日、香織はメリーを連れて朝の十時に家を出た。

朝から雲が多く、夕方には雨が降ると天気予報では言っていたの
で、午前中に散歩をすませてしまえば午後はのんびり出来ると考え
た。

石島の店は休みなので、夕方からは雨というので来ているかも知
れないが、そんな事はどうでもいい。そんな気持ちで公園の駐車場
に車を入れた。

（いた！）

黄色い車が一番目立つ所に置いてある。

（別に構わないわ）

香織は奥の方に車を止め、メリーと一緒に車を降りた。
すると、待っていたかのように石島がジョンとさくらを連れてす
ぐに香織のそばに来た。

「こんにちは」

如才ない挨拶である。

「あつ！ あつ、こんにちは」

咄嗟の事なので香織は少々焦ってしまった。

「今日は雲ってるし、夕方から雨だと言うんで早く来て正解でした
よ」

やはり同じ考えだったのだろう。

香織はええとだけ言って、メリーを連れて公園の奥へ歩いて行っ
た。

その後に、二匹の犬を連れて石島が着いて来た。

（さらっとした顔をしてるわ）

心当たりがないという事が言葉や態度に出ている。

（全く馬鹿らしいわ）

香織は、着いて来る石島に少しずつ距離を離している。

小太りの石島しかり、いつものゆったりペースのジョンとさくらでは香織に追いついていけないのである。

それでも必死に足を速めて香織に着いて来ている。

香織はそんな事に構う事はせず、振り返る事もしないでマイペースで歩いている。

先の方に、何度か話をした事のある年配の夫婦連れの姿が見えた。既にリタイヤしており、健康のために犬を飼ったと言っていた夫婦である。

香織はその夫婦に近づき、挨拶をした。

「あら、同じ考えかしら」

婦人の方が上品に聞いて来た。

「夕方から雨になるって言うてましたからね」

香織はすぐにピンときて、天気のことを言った。

この夫婦も四時過ぎに散歩をしているのを良く見かけていたので、その言葉がすぐに出た。

犬はミニチュアダックスを連れており、メリーとは相性が良いのである。

しかし、この夫婦と一緒に歩いていては、やがて石島に追いつかれてしまう。

そう考えた香織は咄嗟に機転を利かせて、グイグイ引っ張っているメリーのリードを離した。

メリーは常に走りたくてウズウズしているので抵抗がなくなると突っ走るのである。

香織は夫婦に頭を下げ、突っ走ったメリーの後を追った。

これで石島との距離は前と同じくらい空く事が出来た。

そして公園を一周し、入口の所へ戻って来た。

（ん？）

驚いた事に、駐車場の入口に石島と二匹の犬がいるではないか。という事はあのまま香織の後は追わず駐車場の方へ戻っていたの

である。

「呆れた」

香織は思わず声に出してしまった。

石島は駐車場の脇のベンチに座り、その下に二匹の犬が寝そべっている。

香織は見ぬ振りをしてメリーの引つ張りに委ね、駐車場の方には行かないで公園内を再び走り出した。

石島はそれを見ている。

動きが鈍いのか、香織の後を追おうとはしなかった。
時計を見ると十時五十分を指している。

（後一周してみよう）

公園をのんびり一周すると、四、五十分かかる。
後一周すればお昼である。

昼食を摂りに石島はどこかへ行くはずである。

たといえても、お昼にするからと言えばスンナリ帰る事が出来る。
そんな事を考えながらメリーに引つ張られて公園内を歩いている。
途中、池があるので釣り人の釣果を見たりして時間を費やし、十
二時少し過ぎに駐車場に戻った。

黄色い車がある。

しかし、石島と二匹の犬の姿が見えない。

公園の中にいるのだろう。

香織はそう考え、黄色い車の横を通り、奥にある自分の車へ向か
った。

速足で車に近づき、チャッとベンチに目を遣った。

駐車場の奥には公園との境にいくつかのベンチがある。

そのベンチの一つに石島が座っているではないか。

二匹の犬は下で寝そべっている。

香織の車のすぐそばである。

香織は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに平静を装い、軽く会釈をし
て自分の車に乗り込んだ。

バックミラーを見ると石島が香織の方を見ている。

明らかに待っていた感がある。

何か言いたそうな顔をしていたが、香織は構わず車を発進させた。バックミラーを見ると、追って来る様子はなかった。香織はひとまず安心し、ほっとため息を漏らした。

家に帰り、昼食の支度に取り掛かろうとした時、村井さんからメールが来た。

夕方から雨が降りそうなので、もう散歩は行っただしょうかという内容であった。

その意図は、石島が公園にいたかという事である。

石島の店は休みだし、夕方から雨が降るという事なので早めに公園に来るのではないかと心配してのメールであった。

香織が公園での出来事をメールすると、

『じゃ、夕方はいないわね』

と、絵文字を交えたメールが返って来た。

『朝からいたので夕方には帰ってると思うわ』

香織は当然の事のように伝えた。

『そうよね。朝から一日中いるわけないものね』

村井さんのこだわりがいつもと違う事に気が付いて、

『何かありました?』

と、香織が聞いてみた。

『ええ。今日は主人が休んでいて、私の仕事が終わったら一緒に散歩をしようって言うのよ。石島さんがいたら嫌だから』

『大丈夫よ。知らん顔をしていれば寄って来ないわよ』

石島は、変は事をしないとわかっている。香織は心配ないと言った。

『ならいいけど。変に付きまとわれたら主人が気にすると思って』

『ああいう人は男性が一緒の時はいつこくしないと思うわ。どうしても嫌だったら他の公園にしたら?』

『ええ。他の公園でもいいんだけど、私の車を知ってるでしょう。』

それこそ違つ公園で遭つてでもしたら、もう絶望よ』

『それはそうね。しかし、そうであつてもご主人が一緒なら近づいて来ないと思うけど』

『そう願うしかないわ』

村井静香は安心したのか、気が病んだままなのか、それ以上はメーイルを送つて来なかつた。

6

昼が過ぎ、ポツポツと雨が降つて来た。

これでは犬の散歩は出来ないと思つていたが、二時頃から止んで一時陽が出て来て路面を乾かしていた。

そして静香が仕事から帰つて来る時刻、雨粒はまだ落ちるのを我慢していた。

「行つてみるか」

静香の夫と愛犬のロンドンは静香の帰りを待つていた。

「ええ……」

あまり気乗りはしないが、嫌そうな素振りには夫に見せるわけにいかない。

ロンドンがワサワサしている。

静香が仕事から帰つて来ると散歩へ行くものと思つていたので、静香の側を離れないのである。

「わかつたから……」

ロンドンをあやししながら静香は今脱いだ靴をスニーカーに履き替え、夫と共に玄関を出て行つた。

例の公園へはすぐの距離である。

空はどんよりと曇つており、今にも泣き出しそうな気配である。

静香は公園の中を伺つようにそろりと駐車場に入れた。

（いた！）

黄色い車が端の方に止まつている。

時計を見ると三時四十五分を差している。

（朝からずっといるのかしら？）

静香は車を止めると、辺りをキョロキョロ見回してロンドンを降りた。

夫の高広は、ほほおと言いながら助手席から降りた。

「ウィークデイなのに車が多いんだね」

「ええ、釣りに来ている人が多いのよ」

そう言いながらも、静香は辺りをキョロキョロしている。

こんにちは。

犬の散歩をしている者同士、気軽に挨拶を交わす。

日常的に単なる散歩をしている者同士、初対面で果たして挨拶をしているのかどうか。

犬という共通の仲間意識が働いて、お互いが身近な存在になっているのかも知れない。

「結構いるんだね」

犬の散歩の多さに高広が感心した。

「樹がいっぱいあるし、歩く道が何本もあって犬の散歩には凄く良いのよ」

静香はこの公園が家から近いという事だけではなく、公園の広さや造りに満足しているのである。

しかし、たった一人のためにこの公園を嫌いになろうとしていた。その一人が姿を見せないのである。

いつもの事なら静香の姿を見ればすぐに纏わり付いて来るのだが、今日はいつもと様子が違うので来れないのだろう。

石島の事だから、木の陰に潜んで静香の事をじっと見ているに違いない。

そんな事を考えていると、背筋に冷たい物が走るのを静香は感じてしまうのである。

相手が見えない恐怖に静香の心は落ち着かないでいる。

（凄く嫌）

夫と一緒に犬の散歩。

滅多にない事なのでお喋りをしながら楽しいはずなのに、あの一人のために全てを壊されている。

いつの間にか、静香の中では煩わしい男から憎悪の男に変わりつつあった。

そんな気持ちをよそに、ロンドンが高広もいるので嬉しそうである。

「ちょっと座りましょう」

公園を半周した所で静香がベンチに腰を降ろした。

高広も腰を降ろし、ロンドンをあやしている。

静香は携帯電話を取り出して、石島の車があるけど本人がいないと香織にメールを送った。

『呆れたわね、村井さんが来るのを待っていたんだわ。ところがご主人が一緒なので木の陰にでも隠れているのよ。馬鹿な人ね』

香織からのメールは案の定という感じである。

『そうなの。木の陰から見られている感じがして凄く嫌な気分なの。もう耐えられない』

静香が訴えた。

『そうよね。どこから見られているかわからないなんて凄く嫌よね。今日は早く帰った方がいいんじゃない？』

『そうするわ』

静香は高ぶった気持ちを押さえるのだが、なかなか押さえられそうになかった。

香織の言うとおり、このまま犬の散歩は続けられそうもないので後半周で帰るつもりでいる。

「ちょっと疲れたみたい」

「無理もないよ。仕事を終えてすぐだからな」

夫の高広は仕事の疲れたと思っている。

「ええ・・・」

どこからの視線を感じながら、静香は腰を上げた。

そして残りの半周を歩き、駐車場に戻った。

黄色い車はそのままである。

ロンドンを後ろの席に入れ、夫は助手席で運転は静香である。エンジンを駆け、車をそつと発進させた。

この光景もあの男はどこかで見ているはずである。

静香は、ぞくつとしながら出口に向かった。

ふとルームミラーに目を遣ると、ミラーの中にあの男と二匹の犬が写ったのである。

静香の心臓が高鳴った。

車を止め、じつとルームミラーを睨んだ。

「どうした？」

夫の高広が不審な顔をして聞いてきた。

しかし、静香はそれには応えずルームミラーを睨んだままである。

高広がそれに気づき、体を翻して後ろを見た。

二十メートルほど後ろに、二匹の犬を連れた一人の男がいた。

「あの人がなにか」

と高広が言いかけた時、静香が車をバックさせた。

男に向かつてゆっくりとバックしている。

男との距離が十メートル、五メートルと縮んで行く。

そして三メートルになった時、静香がアクセルを強く踏んだ。

と同時にガーンという音がした。

二匹の犬は咄嗟に逃げ、小太りの男は逃げ切れず二、三メートル飛ばされて地面に叩きつかれた。

頭からは夥しく血が流れている。

高広のびっくりした顔をよそに、静香は薄笑いを浮かべている。

そして、静香はおもむろに携帯電話を取り出して警察に連絡した。

「人を轢きました・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2764p/>

出口のない森

2010年12月2日23時55分発行